

社会人基礎力を育成する大学生インターンシップの試み

— マルティニーク島でのコミュニティエンゲージメント型インターンシップの実践例 —

中西久実子
山分志穂
フランソワ・レジナ

〈Résumé〉

Parmi les nombreux stages destinés aux étudiants japonais, des écoles de langue japonaise proposent des programmes d'enseignement du japonais en tant que langue étrangère. Jusqu'à présent, la tendance était de simplement suivre les instructions des professeurs de japonais, soit en les observant soit en les assistant dans leurs tâches. Cependant, de tels stages sont caractérisés par un travail plutôt répétitif et simple. De plus, ces étudiants ne font que l'expérience de l'enseignement du japonais à des étrangers. Outre l'observation et l'assistance, les stages que nous proposons permettent une meilleure immersion, prenant en compte les caractéristiques de la communauté locale, les us et coutumes des résidents et l'histoire locale à laquelle appartient l'école de langue japonaise. Ce type de stage impliquant une prise en compte de l'environnement culturel, de l'histoire et des traditions encourage l'intégration des étudiants et fait appel non seulement à leurs compétences de base, mais aussi à leur aptitude à travailler en tant que professeurs de japonais.

Dans cet article, à partir des résultats des rapports des étudiants participant à ce programme, nous démontrons que nous pouvons accomplir notre fonction première, l'enseignement de la langue, tout en ouvrant le dialogue avec les personnes qui ont un lien direct ou indirect avec l'école de langue japonaise. Tout cela permet ainsi aux étudiants de découvrir et de s'imprégner de leur histoire et de leur culture. Nous serons ainsi en mesure de proposer des stages qui intègrent activement des éléments d'engagement communautaire contribuant à l'intérêt collectif.

はじめに

本研究は、日本語教員をめざす学生のためのインターンシップ（約2週間の短期留学）で、いかにして社会人基礎力を育成するような成果が得られるまでになったかということを示すものである。

これまでの日本語教員養成のインターンシップは、日本語を教える授業を見学したり、日本語教員のTA（ティーチングアシスタント）として単純作業を手伝うだけで終わることが多かった。これに対して、本研究では、周辺の地域社会の人々との対話や、地域社会の歴史や文化を知るといった要素も取り入れ、コミュニティエンゲージメント型のインターンシップとして実践した成果

を示す。

松田武（2017）によると、「コミュニティエンゲージメント」とは、「実際にコミュニティに入り、教室で学んだ知識を活かしながら、地域の人たちとともに地域課題の解決に取り組むサービスラーニング」である。五島敦子（2016）によると、「コミュニティ・エンゲージメント」の目的は、「学問、研究、創造的活動を伸張すること、カリキュラム、教育、学習を強化すること、教養ある市民を育成すること、民主的な価値と市民の責任を強めること、重要な社会的課題に取り組み、公共の利益に供すること」である。

本研究では、就業体験とコミュニティエンゲージメント活動を融合させたインターンシップで、日本語教員としての社会人基礎力が育成できた実践例を示す。

以下の1章においては本研究の背景と問題点を指摘する。そして、2章では、問題点を解決できるようなコミュニティエンゲージメント型のインターンシップ案を開発した経緯を示す。続く3章では、本研究で提案するコミュニティエンゲージメント型インターンシップの利点を実習記録のダイアリで示す。そして、最後に、4章においてインターンシップを受け入れた企業側の事後評価と今後のコミュニティエンゲージメント型インターンシップの改善案を示す。

なお、1章、2章、3章は中西が執筆を担当し、4章は山分とレジナが執筆を担当した。

1. 本研究の背景と問題の所在

本章では、本研究の背景を示し、過去のインターンシップの問題点を明らかにする。

1.1 本研究の背景

文部省（現・文部科学省）・通商産業省（現・経済産業省）・労働省（現・厚生労働省）（1997）によると、大学等におけるインターンシップとは、「一般的には、学生が企業等において実習・研修的な就業体験をする制度のこと」とされている。熊谷智宏（2016）で述べられているように、インターンシップは「就職活動前に社会との接点を持ち、やりたい仕事や適性を確認する機会になる」ものであり、「プログラムを通して企業をより深く知ることができ、志望動機が明確になる」というメリットがある。

インターンシップでは、まずその組織において職務がおこなわれている様子を見学し、次に、同様の職務が遂行できるように訓練をしてから、実際の職務を少し体験するというプロセスをたどる。そして、ある組織に入り込みその組織での職務を円滑に遂行できるようになることをめざす。

日本語教員をめざす学生のための教壇実習もインターンシップの一部に組み込まれることがあり、日本語学校で日本語の授業を見学し、指導案を作成して模擬授業をおこない、教壇実習をするというプロセスをたどる。

1.2 問題の所在

これまで日本語学校で実施されてきた日本語教員養成のインターンシップは「教育実習」とし

て提供されてきたため、日本語学校などの日本語教員のもとで見習いや単純作業のお手伝いをするだけという性格が強かった。教育実習とは、「大学で学んだ理論や知識を基礎として、学校現場で豊かな経験を積んだ教員の指導のもと、具体的・実践的な教育活動を経験することによって教育の実務についての基礎的な理解を深め、教育者としての態度や心構えを養い、教育の実践的な技能を身に付けることを目的とする（國原幸一朗（2020）」ものだからである。

表1は、2017年に国内の日本語学校Aで実際におこなわれた大学生のためのインターンシップのスケジュール表である。表1（太字部分）を見ると、補助的・単純作業をおこなういわゆる見習いが中心となっていることがわかる。たとえば、授業を担当する教員が使用するスライドの作成を手伝う単純作業やイベント準備（コピーを取ったり、印刷をしたりする）といった単純作業である。実際に表1のインターンシップに参加した学生に2017年9月にインフォーマルなインタビューを実施したところ、「ただ疲弊しただけで、自らの適正や教員としての気づきなどを得る機会があまりなかった」との回答を得た。

表1 国内の日本語学校Aでのインターンシップ

	午前	午後
1 日目		オリエンテーション, 学校見学 イベント（日本人と外国人の交流会）準備
2 日目	授業見学（中級レベル）	イベント（日本人と外国人の交流会）準備
3 日目	授業見学（上級レベル）	活動（茶道）の手伝い イベント（日本人と外国人の交流会）準備
4 日目	授業見学（初級レベル）	イベント（日本人と外国人の交流会）準備
5 日目	授業スライド作成手伝い	授業 TA（初級レベル）
6 日目	授業スライド作成手伝い	イベント（日本人と外国人の交流会）運営
7 日目	授業スライド作成手伝い	授業 TA（中級レベル）
8 日目		授業 TA（上級レベル）
9 日目	授業 TA（初級レベル）	授業スライド作成手伝い
10 日目	振り返り, 評価	

表1のようなこれまでの日本語教員養成のインターンシップは、社会人基礎力を培う要素が欠如していると言わざるを得ない。「社会人基礎力」とは、経済産業省（2006）で提唱されている「職場や地域社会で多様な仕事をしていくために必要な基礎的な力」であり、以下の①②③で示される3つの能力で構成される。

- ① 「前に踏み出す力（主体性・働きかけ力・実行力）」
- ② 「考え抜く力（課題発見力・計画力・想像力）」
- ③ 「チームで働く力（発信力・傾聴力・柔軟性・状況把握能力・規律性・ストレスコントロール力）」

宮里心一（2020）では、社会人基礎力に対する行動目標に関して、現在の学生が認識している行動目標の水準と、インターンシップに向けて設けている行動目標の水準」がほぼ一致することが示されており、「他者と一緒に、目標の実現に向けた努力を継続できる」などルーブリック案が提案されている。しかし、ここでは、具体的にどのようにすれば、「他者と一緒に、目標の実現に向けた努力を継続できる」力を培うことができ、社会人基礎力が修得できるインターンシップが実現できるかは示されていない。

そこで、本研究では、単純作業が多かった教育実習としての日本語教員養成のインターンシップを社会人基礎力が培えるインターンシップに変える提案をおこなう。具体的には、実際に日本語学校を含むコミュニティーに入り、教室で学んだ知識を活かしながら、地域の人たちとともに地域課題の解決に取り組むサービ斯拉ーニング、つまり、社会人基礎力が育成できるコミュニティーエンゲージメント型のインターンシップの実践例を示す。

2. 本研究におけるインターンシップの改善のプロセス

2章では、執筆者がコミュニティーエンゲージメント型のインターンシップを開発した経緯を示す。

2.1 本研究におけるインターンシップを開発した経緯

一般社団法人J imagine は、2013年より日本へフランスからの学生をインターンシップとして受け入れをしてきた。そして、2015年度からは京都外国語大学において、執筆者（中西）と協力して日本語教育と企業インターンシップを融合させた取り組みを実践してきた。その内容は、日本の企業でインターンシップをおこなうフランス語母語話者が3か月程度日本に滞在する間、必要な簡易な程度の日本語会話を京都外国語大学の学生が先生役になって教える活動であった。この活動は2015年以降2020年現在まで継続しており、参加者から安定的に一定以上の評価を得られる質の高いプログラムとなった（中西久実子・井元麻美（2019）、中西久実子（2020））。そこで、2019年6月、執筆者は、同様のインターンシップを、学外（フランス海外県マルチニーク島¹⁾の日本語学校）でおこなうものとして新たに内容も検討しなおすことにした。

2.2 本研究で開発した日本語教員養成のためのインターンシップ案

ここでは、本研究で新たに開発したインターンシップの試行錯誤の過程を示す。

2.2.1 文化体験とアクティビティが多すぎたインターンシップ案①

最初に執筆者が考えたインターンシップ案①は表2のとおりで、文化体験やアクティビティ要素が強すぎた。

表2 文化体験とアクティビティが多すぎたインターンシップ案① ※**就**は就業体験。

1 日目	日本出発
2 日目	マルティニーク空港到着後宿泊先へ移動
3 日目	オリエンテーション後、ジョゼフィーヌの生家、“La savane des esclaves”) 見学
4 日目	午前 地元小学校を訪問し、折り紙を教える、午後 市場を散策
5 日目	日本語学校で日本文化講座／日本語を教える 就
6 日目	ラム酒の蒸留所博物館を見学、有機農法の農業体験
7 日目	Japan Day 特別学校にて交流会【折り紙、習字、和菓子】
8 日目	無人島ツアー
9 日目	マルティニーク空港出発
10 日目	パリ経由で帰国

表2のインターンシップ案を執筆者（中西）の勤務校（京都外国語大学）の担当部署（キャリアセンター）に提案したところ、下に示す（1）のように否定的な回答を受けた。その理由は、就業体験が少なく、実質7日間のインターンシップ期間中、5日間をラム酒の蒸留所博物館の見学など文化体験や、無人島ツアーなどアクティビティとしていることであった。

（1）2019年6月6日 京都外国語大学キャリアセンターからの回答

今回送られた企画書では、内容がキャリアセンターで受けられるインターンシップにするには、アクティビティの要素が強く、就業体験が少なすぎると感じています。

2.2.2 就業体験と文化体験を融合させたインターンシップ案②

そこで執筆者は、上の（1）の回答の後、現地の日本語学校での就業体験を増やし、再度インターンシップ案を作成した。そのインターンシップ案②は表3に示すとおりである。9日間のインターンシップ期間中、5日間を現地の日本語学校 MIRAIZU でインターンとして勤務することとし、就業体験を増やした。表3のインターンシップ案は、京都外国語大学）の担当部署（キャリアセンター）からも、京都外国語大学外国語学部日本語学科教員からも肯定的な評価を得ることができた（2019年9月17日）。

しかし、コミュニティエンゲージメント型のインターンシップとしては、「地域の人たちとともに地域課題の解決に取り組む」要素が少ないと感じられた。

表3 就業体験と文化体験を融合させたインターンシップ案② ※就は就業体験。

1 日目	日本出発
2 日目	マルティニーク空港到着後 宿泊先へ移動
3 日目	オリエンテーション
4 日目	日本語学校にて実習 就
5 日目	日本語学校にて実習 就
6 日目	日本語学校にて実習 就
7 日目	課外の文化活動
8 日目	日本語学校にて実習 就
9 日目	日本語学校にて実習 就
10 日目	課外の文化活動
11 日目	交流イベント準備
12 日目	交流イベント実施
13 日目	マルティニーク発
14 日目	パリ経由で帰国

2.2.3 コミュニティエンゲージメント型のインターンシップ案③

執筆者はさらにインターンシップの案を練り直した。執筆者のうち、山分とレジナが所属する企業（一般社団法人J imagine）がそのネットワークを駆使し、現地法人（ROYAL ジュース・ジャム会社、LA MAUNY ラム酒の蒸留所など）の関係者にも今回のインターンシップのサポートをお願いできることになった。また、現地の大学の関係者とも相談することができ、企業や地域社会にもメリットのあるコミュニティエンゲージメント型インターンシップを2020年2月にフランス海外県マルティニーク島で実施できることになった（表4、約2週間の短期留学プログラム）。

参加が決定したのは、京都外国語大学の私費留学のインターンシップ実習生2名と、その指導者（関西圏の複数の大学の教員）である。

表4の太字部分は、土地の歴史や文化を知り、地域住民との交流を深めるコミュニティエンゲージメント的要素である。日本語学校の内外の一般社会人と対話を重ね、その共同体の歴史や文化を知り、かつ、その地域の人たちとともに地域課題の解決に取り組むサービスラーニング的な要素が盛り込んである。具体的には、マルティニークの火山爆発で廃墟となった施設の再開発の問題や、現地の日本企業（TOYOTA）での社員教育の問題、植民地時代からの人種差別の問題などに向き合うことができるように構成されている。

表4 コミュニティエンゲージメント型のインターンシップ

※**就**は就業体験であることを示す。

1 日目 2/3 月	日本出発
2 日目 2/4 火	マルティニーク空港到着, 地元のラジオ番組でインタビューを受ける
3 日目 2/5 水	就 FORMEO 進学フェアに参加し, 活動をサポートする
4 日目 2/6 木	就 FORMEO 進学フェアに参加し, 活動をサポートする
5 日目 2/7 金	就 FORMEO 進学フェアに参加し, 活動をサポートする
8 日目 2/10 月	就 日本のかき氷を販売する体験をおこなう。その後日本語学校 MIRAIZU にて授業を見学し, 打ち合わせ会に参加する。午後, 市内のビジネススクールを訪問し, 現地の日本語教員にインタビューをする。
9 日目 2/11 火	La Savane des Esclaves (マルティニークの植民地時代のメモリアルパーク) にて歴史と文化の情報収集をし, 現地の人にインタビューをする。 LA MAUNY ラム酒の蒸留所を見学
10 日目 2/12 水	ROYAL ジュース・ジャム会社の工場を見学。 就 日本語学校 MIRAIZU にて日本語授業の実習 (オープンクラス)
11 日目 2/13 木	日本語学校 MIRAIZU の理事に学校創設の話聞くインタビューする
12 日目 2/14 金	就 日本博 (NIPPON HAKU Martinique) の開催準備
13 日目 2/15 土	就 日本博 (NIPPON HAKU Martinique) の開催
14 日目 2/16 日	マルティニークの出身のナポレオン 1 世の妻ジョゼフィーヌの生家見学
15 日目 2/17 月	マルティニーク空港出発, パリ経由で帰国

3. 実習記録ダイアリからわかる「社会人基礎力を育成するインターンシップ」

3.1 コミュニティエンゲージメント型のインターンシップに参加した学生の実習記録

2020年2月におこなったコミュニティエンゲージメント型インターンシップ(表4)に参加した学生は、「ダイアリ」を用いて振り返り学習をおこなった。

「ダイアリ」とは、「教師や学習者が授業中の経験について感じたことや考えたことを記述する日記のことである(山本由紀子(2006))。以下では本インターンシップでのダイアリのデータを引用して示す。ダイアリ執筆者は、京都外国語大学外国語学部日本語学科の景山瑞希氏(K, 2020年2月現在2年次生), 澤歩実氏(S, 2020年2月現在2年次生)である²⁾。

3.2 実習記録ダイアリからわかる社会人基礎力の育成

ここでは、コミュニティエンゲージメント型のインターンシップの参加者のダイアリを引用しながら、参加者の社会人基礎力の育成について分析する。

3.2.1 前に踏み出す力（主体性・働きかけ力、実行力）

次に示すダイアリ（2）を見ると、参加者は限られた環境の中で授業をしなければならない苦境を、自らの①「前に踏み出す力（主体性・働きかけ力・実行力）」で乗り越えたことがうかがえる。

- （2）授業を行った場所は、テレビと椅子のみという形で書くことが困難だったため、なるべく体を使っての授業を考えました。アクティビティでは、伝言ゲームをおこない、楽しみながら日本語に触れてもらうことができましたと思います。（K）

さらに、（3）（4）（5）では、「主体性を持ってプロジェクトに取り組む力、新しいことに挑戦し、あきらめないで責任を持って最後までやりぬく力」が参加者たちに育成されたことがわかる記述がみられた。

- （3）今回のクラスの目標としては、「～が好きです」「～が好きですか」の質疑応答ができるようになる」でした。ほぼ日本語で挑戦し、最初はまとまりに欠けましたが、リピート練習を重ねるごとに、理解した人がまだよく分かっていない人に教えたりと徐々に一体感が出ました。（K）
- （4）この研修では、日本語を教える技術だけでなく、人との出会いの大切さ、何事にも挑戦する大切さなど様々なことを学びました。（S）
- （5）もっとたくさんの方に活動を知っていただけるように私たちも頑張りたいです。（K）

3.2.2 考え抜く力（課題発見力・計画力、想像力）

次に示すダイアリ（6）は、参加者が現地のラジオ局の取材を受けてインタビューを受けたことを示している。参加者は「ストライキ」などフランス社会での社会問題について考えさせられることになった。つまり、参加者は、このインタビューでこれまでの自分たちの知識では対応できないような課題に直面し、それについて自分で考えることを求められたわけである。

- （6）マルチニークの印象などを聞かれました。ストライキについてどう思うかも聞かれました。（S）

次に示す（7）（8）（9）（10）は、その後、参加者たちが、地域の民族の歴史についての知識を深めていることを示している。これらの記述から参加者が、現地の民族の歴史や悲しみを知って衝撃を受けたものの、世界には多様な人種・民族がいることを認識し、それぞれ一人の人間として尊重し合える多様性を持っていることを素晴らしいことと評価できるようになったことがわかった。

- (7) マルティニークの奴隷時代のことを知ることができ勉強になりました。(S)
- (8) 6歳から毎日強制労働させられていた過去を知り、胸が痛みました。(S)
- (9) マルティニークの歴史を知ることによって国についての理解が深まりました。(S)
- (10) このメモリアルパークは、政府の援助なしに個人で作ったもので、後世に伝えようとする姿勢が素晴らしいなと思いました。(S)

この体験の後に、参加者は、現地のスタッフとも議論する機会を作り、さらに日本とマルティニークのつながりを作りたいという気持ちになったと述べている。(11) (12) がその参加者の証言となるダイアリの抜粋である。これらの記述から、参加者たちが、マルティニークの部外者としてでなく、マルティニーク島という地域社会へのコミュニティエンゲージメント活動者としてコミットしようとする計画力が培われたことがわかる。

- (11) 帰りには日本語学校 MIRAIZU の理事 F さんにインタビューする機会があり、マルティニークの理解を深めました。日本とのつながりをもっと作っていけるように頑張りたいと思います。(K)
- (12) また、日本語学校 MIRAIZU のサポートができれば幸いです。(S)

以上のことから、参加者たちはインターンシップをおこなった学校の地域の人々との対話や歴史を知ることによって、日本語を教える以上のことを吸収した。現地の人たちと対話を重ねるうちに、チームで働く大切さを認識できるようになっていったと思われる。参加者の社会人基礎力のうち、②考え抜く力：「考え抜く力（課題発見力・計画力・想像力）」が育成されたと言ってよいだろう。

3.2.3 チームで働く力（発信力・傾聴力・柔軟性・状況把握能力・規律性・ストレスコントロール力）

さらに、参加者たちは、社会人基礎力のうち、③「チームで働く力（発信力・傾聴力・柔軟性・状況把握能力・規律性・ストレスコントロール力）」も培うことができた。たとえば、(13) の証言からわかるように、チームのメンバーと一緒に考える大切さを体験することができた。

- (13) 日本語学校 MIRAIZU に行き、現地で日本語を教えている2人の日本人日本語教師の授業を20分間ずつ見せていただきました。その後、フィードバックをし、授業の改善点や、スピーキング力を重視する授業をどのようにすれば良いのかを一緒に考えました。(S)

そのため、(14) からわかるように、参加者が困難に直面したときも乗り越えることができた。

この証言から「時には衝突しながらも、他者を理解・尊重し、グループで協働していく力」が培われたことがうかがえる。

(14) 途中流れが詰まり、不安になる場面がありましたが、クラスの雰囲気がい欲的でとても助けられました。(K)

さらに、(15) からわかるように、参加者は地域の人々に日本の言語や文化を教えることによって、「チームのメンバーと協力して発信する力」を身につけることができたようである。

(15) 日本文化を教えたり現地の方とコミュニケーションを取る良い経験をさせていただきました。(S)

1章で示したとおり、これまでの日本語教員養成のインターンシップは、社会人基礎力を培う要素が欠如しており、「日本語学校などの日本語教員のもとで見習いや単純作業のお手伝いをするだけ」という問題点があった。

この問題点は本研究で開発したコミュニティエンゲージメント型のインターンシップにより解決の一步を踏み出したと言える。当該の日本語学校における職務の遂行だけでなく、その学校組織を含む地域社会の一般社会人と対話したり、共同体の歴史や文化を知る過程において、参加者たちが社会人基礎力を培うことが確認できたからである。今後、このようなインターンシップを質（内容の改善）と量（参加者数の増加）の両側面からどのように改良していくかについては、次の章で詳しく示す。

4. 企業側の事後評価と今後のマルティニーク島でのインターンシップの可能性

4.1 企業側の事後評価

以下、今回のコミュニティエンゲージメント型インターンシップを主催した企業（一般社団法人 J imagine Corporation）と、インターンシップを受け入れた日本語学校 MIRAIZU、それぞれの視点からのインターンシップに関する事後評価を記す。

【一般社団法人 J imagine からの評価】

マルティニーク島の大学生たちの日本語研修として 2015 年から京都外国語大学の日本語学科と交流を続けているが、2020 年に京都外国語大学の学生がマルティニークでインターンシップをおこなう活動をサポートする礎を築くことができた。このことは、日本とマルティニークの架け橋を活動の大きな目的としている私たちにとって大変意味のあることであった。

【日本語学校 MIRAIZU からの評価】

本校は、日本語学校として設立してからまだ1年目であり、教授方法や授業構成などを試行錯誤している段階でもある。このことから、今回京都外国語大学の教員（執筆者 中西）から現地教員に対して研修・指導する機会を得られたことは、日本語学校の質を担保するうえでも重要な機会であった。また、日本語学校 MIRAIZU の日本語教員は、インターンシップに参加した学生（日本語教員を目指す学生）と意見を交換する機会を得たことで、あらためて授業について考え直し、日本語を教えるということの責任についてもあらためて認識する良い刺激を受けた。さらに、インターンシップに参加した学生が担当したオープンクラスを実施したことで地域社会に広くこの日本語学校 MIRAIZU の存在や活動を知ってもらうきっかけにもなった。

今回、インターンシップに参加した学生には日本語学校 MIRAIZU での実習授業は全て自分たちで準備してもらった。学習者のレベルやニーズ、カリキュラムを考慮して授業の準備をおこない、実際の実習授業の最中でも、学習者の状況を見て臨機応変に判断しその場で対応することが要求された。授業が全てスムーズに進んだわけではないが、学習者たちが理解したことがわかった瞬間、そして、学習者たちが一生懸命授業に参加する姿は学生たちの自信となりモチベーションとなったことだと思う。

さらに、インターンシップの一環としてマルティニーク島のホストファミリーと過ごすことは、現地の家庭環境を肌で経験し、言葉以上のコミュニケーションを体感できたことであろう。そして、マルティニーク島の歴史学習として奴隸村などを訪問しその土地の歴史や民族のことについて知ることにより多様な文化や考えを知るきっかけを得たと思う。このインターンシッププログラムを通じて、学生たちの成長をサポートできたことを嬉しく思う。ダイバーシティな世界を作るためにも、一番大事なことは人と人との交流だと思っている。今回のインターンシップでは国際人を育成するための機会をじゅうぶんに提供できたと考える。

4.2 今後のマルティニーク島でのインターンシップの可能性

執筆者は、2020年2月にマルティニーク島の下記の (a) (b) (c) の面談に成功した。そして、2021年度以降のインターンシップで協力関係を築いていけることを確認しあった。(a) (b) は、就業体験のインターンシップ、(c) (d) は教壇実習のインターンシップ、(e) は地球温暖化を防止するための有機農法の普及をおこなう活動になるインターンシップである。

- (a) C.C.I.E, TOYOTA Martinique の副社長 (Johan PETTIPRES 氏) にインターンシップを依頼する面談
- (b) C.C.I.E, TOYOTA Martinique の副社長 (Johan PETTIPRES 氏) に TOYOTA スクールで講座をおこなう教壇実習のインターンシップを依頼する面談
- (c) MONPLAISIR GROUP 会長 (Olin MONPLAISIR 氏) にインターンシップを依頼する面談
- (d) Université des Antilles Pôle Martinique の副学長 (Odile MARCELIN FRANÇOIS-HAUGRIN 先生) にインターンシップを依頼する面談
- (e) André JUDES CADASSE 氏に「有機農法による農業体験と有機野菜の販売体験のイン

ターンシップ」を依頼する面談

上記の面談の成果を活かし、マルティニーク島の地域課題の解決にさらに取り組むサービスラーニングの要素を強化していく。そのため、2021年度以降にマルティニーク島において、下記の内容を含む表5のようなコミュニティエンゲージメント型のインターンシップを企画する予定である。

- ・現地の農園と滋賀県の農園の協働作業の有機農法で作成した野菜を販売し、地球温暖化対策の重要性を訴える活動をおこなう。
- ・マルティニーク島民の砂糖摂取の過多による健康被害の防止策として、和食による食生活の改善の提案をおこなう。
- ・マルティニーク島の火山の噴火被害で廃墟となった地域をコンサートホールなどとして復興させ、現地の市民に公開する。

表5 今後のコミュニティエンゲージメント型のインターンシップ案

※「就」は就業体験であることを示す。

	午前	午後
1 日目	日本出発	
2 日目	マルティニーク空港到着	「就」実習先の日本語学校訪問・打ち合わせ
3 日目	「就」実習先の TOYOTA 訪問・打ち合わせ	「就」実習先のホテル訪問・打ち合わせ
4 日目	「就」日本語学校での実習 (受付業務, 事務作業補助)	「就」日本語学校での実習 (教壇実習 (授業))
5 日目	「就」TOYOTA での実習 (受付業務, 在庫管理補助)	「就」TOYOTA での実習 (受付業務, 在庫管理)
6 日目	「就」TOYOTA スクールでの実習 (講座準備)	「就」TOYOTA スクールでの実習 (TOYOTA スタッフへの日本語ビジネスマナー講座①の教壇実習 (授業))
7 日目	「就」ホテルでの実習 (受付業務, サービス業務補助)	
8 日目	有機農法の農業体験, 有機野菜の販売体験	
9 日目	「就」(小学校で折り紙教室を実施)	
10 日目	文化体験 (奴隷村見学とインタビュー)	ジョゼフィーヌの生家見学
11 日目	「就」日本語学校での実習 (受付業務, 事務作業補助)	「就」日本語学校での実習 (教壇実習 (授業))
12 日目	「就」TOYOTA での実習 (受付業務, 在庫管理)	「就」TOYOTA での実習 (受付業務, 在庫管理)

13 日目	就 TOYOTA スクールでの実習 (講座準備)	就 TOYOTA スクールでの実習 (TOYOTA スタッフへの日本語ビジネス スマナー講座②教壇実習 (授業))
14 日目	就 ホテルでの実習 (受付業務, サービス業務補助)	
15 日目	終日自由	
16 日目	文化体験 (ヨット/スノーケリング)	火山の噴火被害の地域の復興活動
17 日目	文化体験 (クレオール語講座を受講, 和食による健康講座を開く)	
18 日目	就 日本語学校インターン (受付業務, 事務作業補助, オープン スクール準備)	就 日本語学校インターン (オープンスクール実施)
19 日目	マルティニーク空港出発 パリ経由で帰国	

今後は、マルティニーク島に2校しかない日本語学校と協力して、地域社会の特色・地域住民の特性や地域の歴史を理解する要素をさらに盛り込んでいけるようにするつもりである。そして、日本語教員としての社会人基礎力を育成するコミュニティエンゲージメント型のインターンシップを発展させたいと考えている。

おわりに

本研究では、単純作業が多かった教育実習としての日本語教員養成のインターンシップを社会人基礎力が培えるインターンシップに変える提案をおこなった。具体的には、「実際に日本語学校を含むコミュニティに入り、教室で学んだ知識を活かしながら、地域の人たちとともに地域課題の解決に取り組むサービスラーニング」、つまり、社会人基礎力が育成できるコミュニティエンゲージメント型のインターンシップの実践例を示した。本研究で実施したコミュニティエンゲージメント型のインターンシップの実習記録ダイアリのデータから、インターンシップをおこなう地域の歴史や文化を知り、その地域の人との議論の中で自分の意見を述べたり、他人の意見を聞いたりすることが社会人基礎力を培うのに重要であることがわかった。その論証のためのデータは量的には決して十分とは言えないので、今後データを蓄積して検証を続けていきたいと考えている。

付記

本研究は、京都外国語大学の2019年度の学内研究の助成を受けています。ここに期してお礼申し上げます。また、本研究の執筆に際し、京都外国語大学キャリアセンター給田佳名子氏、京都外国語大学外国語学部フランス語学科・日本語学科の先生方、および日本語学校 Martinique

Japan Academy MIRAIZU 日本文化センター MIRAIZU のスタッフの皆様、景山瑞希氏、澤歩実氏にご協力いただきました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

REMERCIEMENTS

Nous adressons nos sincères remerciements à

- Madame Odile MARCELIN FRANÇOIS-HAUGRIN - Vice-Présidente du Pôle Universitaire de Martinique,
- Madame Marie-Claude DEMELLIÈRE-PASTUREAU - Directeur EGC Martinique,
- Madame Violeta CALVO-BERNET - Responsable International EGC Martinique,
- Madame Marie-Clotilde HARDY-DESSOURCES - Proviseure Lycée Acajou 2,
- Monsieur Armand-Renaud FLAUN - Proviseur Lycée Nord Caraïbe,
- Madame Céline ROSE - Présidente CPME Martinique,
- Monsieur Cyril COMTE - Président Directeur Général CCIE Martinique,
- Monsieur Johan PETITPRES - CCIE Martinique,
- Monsieur Olin MONPLAISIR - MONPLAISIR GROUPE,
- Monsieur André JUDES CADASSE - Co-Fondateur PETIT COCOTIER,
- Madame Véronique LUCIEN - Présidente VB CONSULTING,
- Monsieur Léopold JUPITER - Directeur Général J'imagine SAS,
- Monsieur Guy GIBON - Association les Sakawoulés,
- Monsieur Christian CHAMS - Famille CHAMS,

注

- 1) マルティニーク島とはカリブ海の小アンティル諸島に位置するフランス海外県の島で、公用語はフランス語である。観光地やホテルなどでは英語も通じる。ナポレオン1世の妻ジョゼフィーヌはマルティニーク島出身として知られており、ゴーギャンや小泉八雲は、マルティニークで生活しこの地に魅了された有名人である。
- 2) 本研究は、実習の記録（ダイアリ）を根拠に論証するものであり、ダイアリ記録者（京都外国語大学外国語学部日本語学科の景山瑞季さん、澤歩実さん）も協働学習者の一人として本研究に貢献したいという意向を示されたため、ご承諾をいただき、実名を掲載させていただきました。

参考文献

- 朝倉淳子（2003）『日本語教育実習生の発達過程に関する質的研究－ダイアリ分析手法を用いて－』大阪大学大学院文学研究科平成十五年博士論文（課程）。
- 大谷晋也・西口光一（2019）「『日本語・グローバル理解演習』のコンセプトと設計の指針」『多文化社会と留学生交流：大阪大学国際教育交流センター研究論集』23, pp.29-34, 大阪大学。
- 岡崎敏雄・西川寿美（1993）「学習者のやりとりを通じた教師の成長」『日本語学』12, pp.31-41, 明治書院。

- 岡崎敏雄・岡崎暉（1997）『日本語教育の実習』アルク.
- 國原幸一朗（2020）「教職課程における理論と実践の往還—実習科目における学生の記述を手がかりに—」『名古屋学院大学教職センター年報』4, pp.55-73.
- 熊谷智宏（2016）『絶対内定 2018 インターンシップ』ダイヤモンド社.
- 五島敦子（2016）「コミュニティ・エンゲージメントの評価—カーネギー大学分類の選択的分類を手掛かりに—」『UEJ ジャーナル第 18 号（2016 年 1 月 15 日号）Japan Organization for the Promotion of University Extension』pp.1-8.
- 中西久実子（2008）「日本語教育実習生のダイアリにおけるインプットとアウトプットの再構築」『無差』15, pp.33-45, 京都外国語大学日本語学科.
- 中西久実子（2010）「日本語教育実習における WEB ダイアリの有効性」『無差』17, pp.77-100, 京都外国語大学日本語学科.
- 中西久実子（2020）「「使える日本語」を教えるための「場面・機能・文型シラバス」の重要性—2019 年度のフランス領マルティニークからの外国人企業研修生に対する日本語指導をもとに—」『無差』27, pp.1-15, 京都外国語大学日本語学科.
- 中西久実子・井元麻美（2019）「日本語教員養成課程の日本語教壇実習と外国人企業研修生の日本語学習—日本語教員志望の実習生のメリットと学外から通う日本語学習者のメリット—」『国際言語文化』5, pp.15-32, 国際言語文化学会.
- 松田武（2017）「国内外で地域課題解決に取り組む「コミュニティーエンゲージメント」」『大学 Times』Vol.24（2017 年 4 月発行）, さんぽう.
- 宮里心一（2020）「人間力に対する行動目標の精査に基づくルーブリックの提案」『KIT Progress』28, pp.11-19.
- 山本由紀子（2006）「日本語教師教育研究資料としてのダイアリについて—ダイアリの性質とその読み方についての一考察」, 土岐哲先生還暦記念論文集編集委員会（編）『日本語の教育から研究へ』pp.71-82, くろしお出版.
- 由井紀久子・中西久実子・中俣直己（2009）「実習生の日本語教育能力を高めるためのダイアリ活動—紙媒体から SNS へ—」第 14 回ヨーロッパ日本語教師会ヨーロッパ日本語教育シンポジウム.

参考資料

- 文部省（現・文部科学省）・通商産業省（現・経済産業省）・労働省（現・厚生労働省）（1997）「インターンシップの推進に当たっての基本的考え方」文部科学省ホームページ公開資料.
- 経済産業省（2006）「社会人基礎力に関する研究会—「中間取りまとめ」—」

